

# 草庵仏教

第175号  
(発行日)  
2005年1月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール：kimyou3@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日および12日  
午後3時より。  
\* 8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます  
○ 毎月2回真宗共学の会あり。

## 真宗問答⑦ 法蔵菩薩の五劫思惟

S 「釈尊は大経(無量寿経)の中で、阿弥陀仏の本願を説かれ、その(いわれ)を法蔵菩薩の発願、修行、成就、回向の物語としてお説きになりました。それはおそれと不安に生きる一切の生きとしいけるものに大いなる安らぎと仏徳すなわち涅槃(ねはん)のサトリを与えたいと法蔵菩薩が願われたからですね」

D 「ええそうですね。一切の衆生の迷いと苦しみの本を除きたいと願われました。大経には、法蔵菩薩は次のように自分の願いを師の世自在王仏の前で申し述べておられます。」

〔我、世において速やかに正覚を成らしめて、もろもろの生死勤苦の本を抜かしめん(嘆仏偈)〕

(わたしに、この世で速やかにさとりを開かせ、人々の迷いと苦しみの本を除かせてください)

一切の苦しみが起こるその根源を除こうとされたのです。それは衆生の迷いを転じて悟りを完成させることに外なりません」  
S 「経文でいわれている(生死・勤苦の本を抜く)ことなのですね」

D 「ええそうですね。人間のもろもろの苦しみの本は迷いの心だからです」

S 「一切のものに迷いを転じて悟りを完成させたい、いわば仏陀たらしめたいというのは実に広大な願いですね」

D 「そうですね。ただ問題はこのような広大な願いをいかにして実現するか、ということですよ」

S 「願いは実にすばらしくても、それが実際に実現しなければ、願い倒れであり、それこそ絵に描いた餅ですからね」

D 「それで法蔵菩薩は、どのようにして一切衆生を救うか、それを五劫という長い間思惟された大経には説かれています」

S 「五劫思惟ということですが、劫とはどういう意味ですか」  
D 「劫は時間の単位で、非常に長い時間を表す単位です。どれくらい長いかは(芥子劫)とか(磐石劫)というたとえがあります。磐石劫とは、四方が一由旬(約7キロ)もある大きな岩山があつて、百年に一度天女が舞い降りてきて、その羽衣で払う、そうするとその摩擦でかす

かに岩がすり減ります。それを何度も繰り返して、その結果、岩山が完全に摩滅するまでの時間をいう、というような譬です。その五倍ということですから、およそ想像を絶する長さです。それほど長い間一切衆生をいかにして仏陀たらしめるかをお考えになったというのです」

## 謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

平成十七年元旦

土井紀明 土井眞由美  
山下清人 中村憲二  
迫田忠夫 中村穂積

S 「五劫思惟の話は何をいおうとされるのでしょうか」

D 「一つは、本願のおみのは五劫思惟という思案の限りを尽くされた救いの法だということです。しかもその思案は凡夫の思案ではなくて、法蔵菩薩の智慧すなわち佛智によって思案し尽くされた法だということ。だから衆生が助かるに間違いがない確かな救いの法だということが知られます」

S 「凡夫の思案ではなくて仏が思案し尽くされた。だから間違いない確かな救いだといえるのですね」

D 「ええそうですね。そして第二に、本願の法に対しては凡夫の思案は間に合わないことを教え

られます。仏の智慧で思案されたものですから迷いの凡夫の思案が及ばないことが知られます」

S 「凡夫の思案が及ばないのですね」

D 「そうですね。本願の法は凡夫の思案が及ばない。ですから本願にたいしては凡夫の思案を離れて、不思議と信じるばかりなのです。弥陀の本願は凡夫にとつては不可思議なのです。それを凡夫の知恵や思案が間に合うと思ひ、本願の法を道理的に納得し、訳が分かつたら受け入れようとたくしてしまつてす。しかし、凡夫の思案の枠組みに収まるような小さな法ではありません。広大不可思議の法です。五劫思惟の結果の本願に対しては、凡夫はお聞かせ頂

くばかりなのです」

S 「では聞法には人間の側の思案はいらぬのですか」

D 「いいえ、本願に直接するま

すし、あるいは信心の智慧において教法を思惟することは大いにあっていいこととすし、あるべきです。しかし、本願の仰せを聞く一点において、あるいは弥陀の救済を聞く端的には、凡夫の思案や計らいは役に立たないし、また役立てる必要はまったくないのです」

S 「法蔵菩薩が考え尽くされた救いゆえ、私たちはそのお助けをそのままいただきさえすればいいのです。五劫の思惟は、弥陀の救いに対して、凡夫の思案の限界を露わにしてくださるのです」

D 「そういたされています。ですから五劫思惟と聞けば、(ああ私の思案はいらない。私の救いについては阿弥陀仏の方がすでに考え尽くしてください。私は本願の仰せのままをいただきさえすればよい)とお受けするばかりです」

S 「ということは、五劫思惟とはわれら凡夫の愚かさを知らしめてくださる教説でもあるのです」

D 「そうですね。それから第三に、それはいかにして万人を平等に救うかについての法蔵菩薩(仏)の思惟ですが、それは全ての人を決して見捨てないという大悲を表しています。(こんな奴はどうしようもない。見放すより仕方がない)と見捨てられても仕方がないのが愚かな凡

夫。思案に思案を重ねられたのは、愚かな凡夫にあきれもせず、愛想もつかさず、こんな愚鈍の者をどうしたら救えるかと、どこどこまでも見捨てずに救いたいの大悲深きゆえに長い長い思案を尽くされたのではないでしょう」

S 「最低の者も、最悪の者も見捨てない。どこでも救いたいという、そのためにどうすれば助けられるかと長い長い思案をされたのです」

D 「ええそうです。それほど大悲が広大なのです。ですから五劫思惟は大悲の深さや広さを表しています」

S 「法蔵菩薩が考えに考えてくださったのは私たちが愚悪の凡夫だからなのです」

D 「ええそう思います。もし私たちが賢者であり聖者であるなら、私たちが救うことはさほど困難ではありません。ところが現実の私たちは煩惱に振り回され、愚かさに惑うて、真実に背き、しかも背いているとも知らないで、流転している身です。こんなものを相手にして、それを仏陀にしようとされるのですから、これはもう全く不可能なことを可能にするようなものです。ですからこのために考えに考えて、どうしたら煩惱具足の凡夫に道が着くか、光を見いだすか、救われるか、をお考えになつて、一切衆生が救われる道をつけてくださったのが(本願

を信じ念仏申さば浄土に生まれ

て仏となる)という念仏往生・往生浄土の道(法)ではないでしょう」

S 「そうするとお浄土に生まれて仏になるという教えは、愚かな凡夫に道をつけてくださる教

なのです」

D 「ええそうなんです。もし私たちが凡夫ではなくて賢者であったり聖者であったりすると、必ずしも往生浄土の法は説かれなかつたかも知れません」

S 「賢者や聖者には往生浄土の法門は必ずしも必要ではないのです」

D 「ええそう思います。たとえば(五蘊皆空)という佛教の教があります。五蘊とは色・受・想・行・識の五つで、人間は色という物質的要素と受という感受作用と想という想念作用と行という意志作用と識という認識作用が寄り集まって刻々と変化し連続しているものであって、そのほかに(我)という実体はない。にもかかわらず私たちが我という変わらぬ実体があると思

いて、覚ることができような賢者であったり、あるいはそれを覚るために厳しい仏道修行に耐えられるような道心深い人間であれば、法蔵菩薩の五劫思惟も必要がないでしょうし、往生浄土というようなおてでは必ずしもいらぬであります」

S 「今まで浄土真宗の教を聞き、浄土に往生する道などという、何か幼稚な教のように思っていました。それが、それは私たちが愚悪であるから、そういう私たちににいたるだけの道として弥陀より与えられたのです。五蘊皆空というような法はある意味で合理的に説かれています。いざとなるとそれにはなかなかついて行けないのです」

D 「そう思います。それは清沢満之先生の言葉においてさえいふことができません。たとえば(自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるもの、すなわちこれなり)とか(ただ生前死後の意のごとくならざるのみならず、現前一念における心の起滅、また自在なるものにあらず、我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり)とありますが、これは非常に優れた佛教的、実存的自覚の言葉です。がしかし、もしこの通りに(落在せる自己を自覚せよ)とか(他力の掌中にある自己にめざめよ)とかが求められるのなら、近代

それを体験的に自覚することはよほど直観力の優れた人、あるいは思想的に突きつめていける人だけしか近づけないのではないでしょう。愚鈍な凡夫にはなほだたたりがあるように思います」

S 「近代的知性には受け取りやすくても、それは愚鈍な凡夫の救いにはなほお遠いといえるのです」

D 「合理的に納得しやすい教がかならずしも実際の救いとはならないのではないでしょう。念仏往生の法は知性にはすぐにはうけとりにくくても、いざこの自分がどうしてみようもなく(我が名を称えよ)という仏の仰せのみが残ってその人の最後の救いの光になるのだと存じます」

## 《 真宗共学の会 》

毎月第一木曜日 午後七時より

毎月第三木曜日 午後七時より

(約2時間)

\*先人の著作を輪読しながら、お互いに自由に語りあい、学びあう会です。現在は観経と教行証書類を中心に学んでいます。どなたでも参加できます。

# 歎異抄 第十七章第二講

信心かけたる行者は、本願をうたがうによりて、辺地に生じて、うたがいのつみをつぐのいてのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまわりそうらえ。信心の行者すくなきゆえに、化土におおくすすめいれられそうろうを、ついにむなしくなるべしとそうろうなるこそ、如来に虚妄をもうしつけまいらせられそうろうなれ。

(歎異抄第十七章より)

現代語訳(信心の欠けた念仏者は、阿弥陀仏の本願を疑うことにより、方便の浄土に往生し、その疑いの罪をつぐなつた後、真実の浄土においてさとりを開くとうかがっております。)

本願を信じて念仏するものが少ないので、仮に方便の浄土に多くのものを往生させておられるのです。それが結局意味のないことであるようにいうのは、それこそ浄土の教えをお説きくださった釈尊が嘘いつわりをいわれたと申しあげておられることになるのです。)

\* 辺地というのは浄土の(かたほとり)という意味で、浄土の真ん中ではなくて、辺境の地という、いわばイメージ言語です。浄土そのものではなくて、仮の浄土ということ化土あるいは疑城胎宮ともいわれ、あるいは懈慢界ともいわれています。

では、大般涅槃(この上なきさとり)

の境界である浄土そのものでない、仮の浄土とはなにを意味するのでしょうか。

\*

一つには、弥陀の本願を信じる人はこの世においてすでに真実の浄土に生まれるべき身に定まり、やがてこの世の生涯を終えて、真実浄土に生まれて仏陀となると仰せくださっています。

しかしながら、弥陀の本願を聞き、念仏申しながらも、なお本願を疑う心を離れられず、疑い心で本願と自己との間をへだてている者は、たとえ念仏を申していても真実の浄土に生まれることができません、本願を疑う罪によって化土に生まれるのであると教えられています。だから化土に生まれるのは自らの罪の結果であるといえます。化土が説かれることによつて、私たちは本願を疑う罪の深いことを知らされ、また知らねばならないのです。

もう一つの意味は、化土は念仏行者の罪の報いという側面だけではなく、弥陀如来がしつらいたもう場であるということとです。化土は、本願疑惑の念仏者が、さらに仏法の教化をこうむり、自らの疑う罪を自覚し、本願を信じる真実信心を成就させていただく、そういう場として阿弥陀仏によつてたてられていて境界であるといわれています。化土における教育によつて真実の浄土に往生することができますのであります。阿弥陀仏の大悲の深きによつて、本願を疑惑するものもお捨てられず浄土に導かれていくのです。そのような阿弥陀仏の大悲の働く領域が化土でありましょう。

\*

この化土というものがなぜ立てられねばならなかったのか。それは私たちが自

らの疑惑の心にたぶらかされて容易に本願を信じることができないからであり、それゆえ真の浄土に生まれる人が少ないからです。

聖人は源信和讃に

報の浄土の往生は おおからずとぞあらわせる 化土にうまるる衆生をばすくなくならずとおしえたり

とうたわれています。化土がもうけられ、化土が説かれねばならないのは、大経に(往きやすくして人なし)と説かれていくように、真実信心のものが少ないからであります。信心の人が少ないことを如来は悲しみたまひ、本願疑惑のものを化土にて本願信ずる身にまで養い育ててくださるのであります。

もし化土がなければ、弥陀の本願にであつて法を聞けども、本願を疑う罪ゆえに、浄土に生まれることができず、いたずらに流転を繰り返すばかりでありましょう。ここにも弥陀大悲の思し召しがあり、そこをここでは「信心の行者すくなきゆえに、化土におおくすすめいれられそうろう」と仰せられています。

ところが、異義者は「たとえ辺地に生まれれてもついにむなしくなつてしまふ」といいます。そのことを唯円房は批判されているのです。ひとたび化土に生まれるなら、すぐには真実報土の浄土に生まれなくても、化土においてさらに仏の教化をこうむり、やがて佛智を疑う罪を知つて、「くゆるころをむねとして 仏智の不思議をたのむべし」(聖人「佛智疑惑和讃」)で、本願たのむ信心が成就して、真実の浄土に生まれるとの思し召しであります。

だから辺地(化土)に生まれてもついに地獄におちるなどと異義者が言う

のは「如来に虚妄をもうしつけまいらせられそうろう」と唯円房は嘆かれています。

\*

なお、方便化土ということについて、今日いろいろな解釈がなされています。たとえば、化土という教説は、この世において佛智を疑惑している者が、疑惑ゆえに広大な本願の働きを自分の計らいで限定し、自らの想念の中にとらわれてしまつていて、いわば信仰的に閉塞された状態。それをイメージ言語で説かれたのが化土である、などと説明されています。それはそれで傾聴すべきものであります。

しかし今は、歎異抄の唯円房の立場にできるだけ立つて見たとき、化土というのはこの世の中にあるというよりは、本願を疑惑しつづ念仏申す者のやがてこの世を終えて生まれる領域とうかがえます。それは経文のままに手を加えずに読むときにはそのように受け取られます。それで私も経文のままに、ここで受け取つていくわけです。それで私は少しも不足を感じないのであります。ここにも如来の大悲の深さを十分に感じるのであります。

ただ、化土という領域が凡夫に実際に明確になるのは浄土に生まれて佛の智慧をいただくとき、自ずからハッキリするのではないのでしょうか。

今はただ、仏は真実智慧の方、私は愚か者。それゆえ仏の仰せを聞かせて頂き、その通りに受けとらせていただいている、それで十分満足しているのであります。

### 平成17年度御年忌年回表

1周忌	平成16年亡
3回忌	平成15年亡
7回忌	平成11年亡
13回忌	平成5年亡
17回忌	平成1年亡
25回忌	昭和56年亡
33回忌	昭和48年亡
50回忌	昭和31年亡

(25回忌をせずに23回忌と27回忌とする場合があります。また50回忌以後は50年ごとになります)